

「小さな旅」と「小さい旅」

三 枝 令 子

1 はじめに

物事の有り様を示すのに用いられる「静かな」「きれいな」「元気な」という一連の語がある。これまでの学校文法では「形容動詞」と呼ばれてきたが、この呼び方は適当ではない。古文では、静かにあり、堂々とあり、と、もともと動詞を伴っていたから「形容動詞」だが、現代語では、動詞性はない。そこで、これらの語が形容の働きを持つ点から、「あつい」「大きい」を“い形容詞”と呼び、それに対してこれらの語は「な」で名詞に接続するから“な形容詞”と呼ぶこともある。あるいはまた、これらの語は、名詞に相当する語に助詞「だ」が付加したと考える人もいる。「静かな」「静かだ」「静かに」は、「静かだ」の活用ではなく、「静か」に助動詞の「だ」が続き、その「だ」が、「な」「だ」「に」と活用すると考えるのである。これは、名詞に「だ」が接続した場合と、ここで問題にしている語が、次のように同じ活用を示すからである。

学生だ 学生じゃない 学生だった 学生になる 学生の
静かだ 静かじゃない 静かだった 静かになる 静かな

こう考える人たちは、これらの語を名詞に近いととらえて、形状名詞と呼んだりする。もちろん、ここで問題にしている語と、名詞とは完全に一致するわけではない。意味だけではなく、活用の点でも、名詞修飾の仕方が異なる。しかし、“な形容詞”と名詞だけではなく、従来、形容動詞と呼ばれてきた語と形容詞と名詞との間にも、明確な境界線は引きにくい。名詞は、格助詞を伴う点とその大きな特徴なので、「を」や「の」を伴うか否か、また「な」や「い」を伴うか否かでテストしてみると、次のように分布は連続する。

	「い」を伴う	「な」を伴う	「を」を伴う	「の」を伴う
あたたか	○	○	×	×
静か	×	○	×	×
健康	×	○	○	○
病気	×	×	○	○
特別	×	○	×	○

ここで取り上げようとしている「大きな」「小さな」という語は、上にあげた語の中では「あたたか」に最も近い。次の表は「い」と「な」の両方を伴う語の一覧と KWIC データ⁽¹⁾におけるそれらの語の頻出頻度である。

表1. 「い形」「な形」の頻度

い形		な形		い形		な形	
浅黒い	3	浅黒な	0	手荒い	1	手荒な	1
あたたかい	53	あたたかな	3	ナウい	3	ナウな	0
甘辛い	1	甘辛な	0	幅広い	107	幅広いな	0
意地悪い	1	意地悪な	2	腹黒い	1	腹黒な	0
大きい	1013	<u>大きな</u>	1935	ひ弱い	0	ひ弱な	2
おかしい	173	<u>おかしな</u>	34	間近い	9	間近な	5
おめでたい	5	おめでたな	0	真っ黒い	4	真っ黒な	8
きめ細かい	16	きめ細かな	19	真っ白い	7	真っ白な	11
細かい	135	細かな	45	まん丸い	0	まん丸な	0
四角い	14	四角な	5	柔い	0	柔な	1
小さい	530	<u>小さな</u>	774	柔らかい	32	柔らかな	2
茶色い	12	茶色な	1				

ここに挙げたものの中で、下線を引いた「大きな」「小さな」「おかしな」だけは、それ以外の語が「な形容詞」の活用をするのに対して、連体形しか持たないという点で特異である。たとえば、「あたたかな」には、「あたたかだ」や「あたたかになる」という形がある。ところが、「大きな」「小さな」には、「大きだ」「大きになる」といった活用の形がなく、名詞修飾のこの「な形」形しか持たない。ということでは、むしろ形容詞の「大きい」「小さい」「おかしい」が、名詞修飾する時に限って、「大きな」「小さな」「おかしな」という形を持つと考えた方がよいだろう。表中の語の「い形」と「な形」の使用頻度を比べてみると、「大きい」「小さい」では、「な形」の方が際立って多く用いられているのが目を引く。小稿では、KWIC データをもとにこの「大きい」「大きな」「小さい」「小さな」の使われ方の実態を観察し、同時に「い形」「な形」の意味、機能の違いを考えてみたい。

2 日本語教科書での扱い

「大きな」「小さな」を「大きい」「小さい」の特殊形と考えると、その使用範囲は限られているように考えがちだが、現実には、「な形」の方が多く用いられている。次の表は、形容詞が終止形として用いられる場合と、体言（名詞）に連なる場合の数を比較したものである。参考までに「おかしい」のデータも添える。

体言に連なる場合を比べてみると、「な形」が「い形」の倍近く使われていることがわかる。ところが、我々には日頃「い形」よりも「な形」を多く使っているという自覚があまりない。この理由を考えてみるのも面白いことだが、ここでは外国人のための日本語教科書の

表 2. 「い形」「な形」の用法別頻度

	終止用法	連体用法
大きい	552	461
大きな	—	1935
小さい	127	403
小さな	—	774
おかしい	163	10
おかしな	—	34

扱いを見てみよう。

「大きな」「小さな」にまったくふれていない教科書もある⁽²⁾が、取り上げている場合も、テキストの終わりの方で、簡単にふれるというのが一般的なようだ。たとえば、『初級日本語』（東京外国語大学留学生日本語センター）では、い形容詞は述語用法、連体用法ともに2課で初出し、一方、な形容詞は4課に出てくるが、「大きな」「小さな」の提示は、28課中の24課である。『An Introduction to Modern Japanese』（The Japan Times）では、「大きな」「小さな」は、30課中の28課に、本文ではなく「読む練習」中に、「入学試験をどうかえるか」ということは、大きな問題である。」という文が出され、「ookina and chiisana are used only before nouns and pronouns.」という注がついている。いくつか目を通した中でこの語の扱いが早いのは、『Japanese for Today』（学研）だった。そこでは、形容詞がはじめて出てくる2課で、注の形で先ほどのテキストとはほぼ同様な説明をした上で「ōki-na kōjō (=ōkii kōjō), chiisa-na kōjō (=chiisai kōjō)」という例もついている。初級教科書の扱いが概して小さいのは、「い形」と「な形」があることをしっかり認識し、活用の違いを身につけることの方がこの段階ではより大切だと考えるからだろう。また実際、名詞を修飾するときに「い形」を使っても多くの場合間違いとは言えない。ところで、初級で扱われなかったこの問題は、中級レベルで取り上げられるかという点、そういうようにはなっていない。我々は、名詞を修飾する場合には「な形」を「い形」の倍近く用いているにもかかわらず、その使い分けについてはきちんと説明せず、使い方の習得は、どうも学習者自身に任せてしまっているようだ。そこで、次に使い分けの実態を観察してみよう。

3 「い形」が使われるとき

先の表 2. にあげた終止用法と連体用法をもう少し詳しく見てみることにする。まず終止用法としたのは、次のものである。

1 言い切りの形。

- 1) 本体は、トースターよりひとまわり小さい。

- 2 「が」「から」「ので」「のに」「ながら」「し」「と」等の接続助詞を伴うもの。
- 2) 既存の産業に比べるとスケールは小さいが、活気はすごい。
 - 3) 子どもはまだ小さいから、教育費もかかりません。
 - 4) 低迷続きの県高校野球界に、小さいながらひとつの明かりをともしてくれたといえよう。
 - 5) 被覆面積が大きいと、身体からの放熱が抑制されて暖かく、逆に露出部分が大きいと放熱が盛んになり涼しくなる。
- 3 引用の「と」を伴うもの。
- 6) 世界で十四番目の額で、「まだまだ小さい」と、タイ政府スポークスマンは不安解消につとめている。
 - 7) 小さいといえども、成熟したオスは、よしはらの中で約三十平方センチの縄張りを持つ。
 - 8) 逆のものは、極性が小さいと考えてよい。
- 4 終助詞「か」「ね」「よ」「の」等を伴うもの。
- 9) DATA の値が SAIDAI の値より小さいか、または等しければ、移しかえないで、次のカードを読む。
 - 10) 国会議員の役割が大きいね。
- 5 「だろう」「です」を伴うもの。
- 11) その波及効果は大きいだろう。
- 6 「のだ」を伴うもの。
- 12) つまり、抵抗は固く丈夫なほど爆発は大きいのだった。

これらの例では、「小さい」「大きい」が述語として使われていることが明らかで、いずれの例も「い形」を「な形」に置き換えることができない。

4 「な形」「い形」の使い分け

体言（名詞）に連なる場合には、次のように「い形」も「な形」も使われる。

- 13) 底に小さいあなをあけた試験管に、あえんをいれ、ピーカーまたはコップに、き硫酸をいれておきます。
- 14) 糸をとめるには、しんどう板の真ん中に小さなあなをあけて、糸をとおしてとめるようにします。

しかし、体言に連なる場合をよくみると、「い形」が修飾するのは圧倒的に形式名詞が多い。次の表は、「大きな」「大きい」「小さな」「小さい」それぞれが名詞に接続する場合のその名詞を、上位6位まで並べたものである。

表3. 「い形」「な形」に接続する名詞（頻度順）

	1	2	3	4	5	6
大きい	もの 52	こと 32	ほど 27	とき 15	場合 14	ほう 13
大きな	影響 85	声 47	問題 34	役割 34	被害 33	変化 28
小さい	もの 33	とき 21	の 21	ほう 17	ほど 14	子・子ども 13
小さな	あな 18	町 17	目 15	声 14	子・子ども 11	もの 12

これを見ると、「な形」はいわゆる名詞に接続するが、「い形」は、形式名詞に接続することが多いのがわかる。形式名詞へ接続するということは、その形容詞と名詞の関係が述語用法に近いということを示している。

- 15) 全国の病院数、ベット数は増え続けているものの、地域格差は依然として大きいことが、29日、厚生省がまとめた「病院報告」で明らかになった。

この例で「明らかになった」のは、「地域格差が依然として大きい」ことだから、この「大きい」は述語用法である。この用法を先の終止用法に含めなかったのは、こうした「い形」は、先の終止用法とは異なり、「な形」に置き換えることが可能なためである。連体修飾節の中で、「い形」「な形」が述語のように用いられるのは、続く名詞が次のような場合である。

- 1 「ため」「の」「こと」「ほう」「ところ」「せい」等の形式名詞。

- 16) ドルが強い基本的な理由は、米国の財政赤字の規模が非常に大きいため、米長期金利が高くなっているからだ。
 17) 夢二の女の目があれほどに大きいのは、メランコリイのめがねをかけていたせいかもしれない。
 18) 経済面での被害が予想以上に大きいことが次第にわかってきた。
 19) 彼女は背が小さい方で、決して美しくはなかった。
 20) ぼくは体はでかいんじゃけど、気は小さいところもある。

- 2 「うち」「とき」「ころ」「場合」等の時を表す名詞。

- 21) 田植機の普及で、苗が小さいうちに移植され、作期が早まっているのは事実だ。
 22) うちの子どもが小さいとき、よくよその子どもさんを読んで泊めていたわね。
 23) 誠は小さい頃からおとなしい子だったという。
 24) ロールキャベツは、煮込む鍋が大きい場合、動いて形がくずれるのを防ぐために、落としぶたをすとよい。

- 3 「だけ」「くらい」「ほど」「わり」等の副助詞

- 25) その穴は、画面の側では小豆のように小さかったが、裏から見るとちょうどじょうご形に広がって、一ドゥカット貨幣かもう少し大きいぐらいになっており、あたかも婦人の麦藁帽の冠飾りのようであった。
 26) 両選手とも体が小さい割にがっしりしていて、脚力も素晴らしかった。

上に挙げた語は、「な形」を取ることも可能なのだが、実際には、ほとんど「い形」を取っている。また、これらの語に「だ」が接続して、助動詞に相当する表現を作る場合があるが、この場合も「い形」が用いられることが多い。

- 27) ……一時的な所得増加からの消費支出性向はちいさいはずである。
 28) 平均的な場合は、最悪の場合よりも最適の場合にずっと近く、路長は最適値より39% 大きいだけだ。
 29) しかし、魚群がいくつか発見されており、また魚体も大きいことから、関係者の期待は大きいようだ。
 30) 丸顔で目が大きいせいだろう。

こうしてみると、体言に連なる場合でも述語用法であれば、「い形」が用いられることが多いと言える。連体修飾節の内容が、「より」を用いた比較の文の場合にも、当然のことにその「い形」「な形」は述語用法である。

- 31) このことから、エタールの膨張の割合は、水より大きいことがわかる。
 32) しかし、おしゃもじよりずっと大きいラケットで打つものだから、野球のようにまさか空振りはしないだろうと、だれでも考える。

次の表は、先の表2.の連体用法における比較文の数を、「い形」「な形」で比べたものである。

表4. 比較文の頻度 ()内は素データ数

～より大きい	18% (81)	～より小さい	16% (63)
～より大きな	1% (20)	～より小さな	0% (3)

ここでも述語的な用法の場合には、「い形」が多く用いられるのがわかる。

これまで述べてきたように、体言に連なる用法でも、その「い形」「な形」が述語的に用いられることはあり、その場合は、終止用法と同様、「い形」がよく用いられる。ところが、そうした述語的な用いられかたでありながら、「な形」もよく用いられる場合がある。その一つは、名詞が形式名詞「もの」の場合で、「もの」は「な形」ともよく結びつく。先の表3.を見てもわかるように「い形」の1位の名詞であると同時に、「小さな」6位、「大きな」7位の名詞にもなっている。

- 33) ばねばかりは、20 Kg ぐらいまではかれる大きなものが多い。
 34) ぐい呑みで酒を呑んだ味を知ってからは、京杯のような小さなものでは酒は呑めなくなる。
 35) 今の見通しでは、貿易収支の黒字が相当大きなものになる。

- 36) ほとんどを海外に依存しているわが国において、国産原油発見の意義は大きなものではなかろうか。
- 37) 米国の平和運動でソ連が果たしている役割は、大統領が示唆したものよりもずっと大きなものだ。

最後の例は、「大きな役割」という語の結びつきの強さも関係しているだろうが、「もの」という形式名詞が実体を意味する名詞性を強く持っているために、33) 34) のような「もの」が明らかに存在物を表し、それを「大きな」「小さな」が修飾する場合だけでなく、36) 37) のような述語用法であっても「な形」が使われていることがわかる。

述語的な用法でありながら「な形」もよく用いられるもう一つの場合は、国廣他（1982）が挙げている例である。国廣らは、連体修飾節のなかの述語には「な形」が来にくいとして、次のような文を挙げている。

口が小さい花瓶がほしい。

? 口が小さな花瓶がほしい。

この場合「ほしい」のは、「小さい花瓶」ではなく、「口が小さい花瓶」である。つまり、連体修飾節の中の述語用法には「な形」が来にくいということで、その趣旨に異論はないが、ここで挙げられている「口が小さな花瓶」という用例自体は筆者には十分可能なように思える。実際、次に見るように連体修飾節の述語として「な形」が使われる例は決して珍しくない。

- 38) 目ばかり大きな男の子。
- 39) 最初は体の大きなタヌキが餌を食べに来る。
- 40) 忍びだこの大きなやつが、両足親指の付け根にできていた。
- 41) 径の小さなメネジは、バイトで切ることが不可能なので、タップで切削する。
- 42) 前に出された腰高の戸板に、ゆでたばかりの、太長い爪のわりに、甲がやや小さなズワイガニが、無造作に山積みされていた。

最後の例は、「小さなズワイガニが山積みされていた」わけではなく、「甲が小さいズワイガニ」が「山積みされていた」わけで、この「小さな」は、述語用法である。上にあげた例では、名詞修飾の主語と、修飾される名詞との関係は「男の子の目」「タヌキの体」「メネジの径」のように全体部分関係になっている。たしかに、「い形」は述語用法に使われることが多いが、この全体部分関係はその例外的なケースで、こうした構文では、修飾節全体が形容詞のように機能しているので「な形」も使われると考えられる。

5 「な形」「い形」が修飾する名詞

4で連体修飾節内の述語用法にはもっぱら「い形」が使われることを見た。では、形式名詞以外の名詞に「い形」「な形」が接続する場合、「な形」「い形」によって、接続する名詞に違いはないのだろうか。次ページの表は、それぞれに続く名詞のリストである。

実は、「い形」に接続する名詞としては形式名詞の頻度が最も高いのだが、ここでは形式名詞を除いた名詞で見ている。こうしてみると、まず第一に「な」に続く名詞には抽象名詞が多いことがわかる。実際次の例に見るように、抽象名詞には、「い形」は接続しにくい。

43) 若い世代を代表する書き手として { 大きな }
*大きい 人気を集めている。

44) それに、すさんだ心の人が時折見せる { 小さな }
*小さい やさしさが何より好きだからと語る。

一方、「大きい」に続く名詞には、具象名詞、中でも空間関係を表す語が多い。「小さい」に普通名詞が続くことは少ないが、その場合には、「値」に代表される数量関係の語の来るのが特徴だ。すなわち、「大きい」「小さい」は、客観的な大きさ、物理的な大小を問題にしていると言える。「い形」でなければならぬ名詞としては、唯一「小さい順、大きい順」の「順」があげられる。この名詞のみ修飾語と名詞との関係が、他の名詞が、たとえば、「大きな地震」から「地震が大きい。」への言い換えが可能なのに対して、「順が大きい。」とは言い換えられない外の関係⁽³⁾にある。

大きさについて我々は、物理的な大小だけでなく、心理的に大きいと言いたいことも多い。あるいは、客観的な基準はなく、心理的な大きさしか問題にできないことがらも多い。その時に、物理的な大きさと区別して「大きな」を用いると考えられる。

45) だけど、小さな池の大魚に飽きたらず、ニューヨークに出てきたら、大きな池のメダカになっちゃった。

46) 健康が何よりだと言っていた病弱で小柄な大叔父の大きな頭には、まだまだ多くの古代史の引き出しがあったに違いない。

「大きい柱」と「大きな柱」、「大きい壁」と「大きな壁」、「大きい鍵」「大きな鍵」、「大きい曲がり角」「大きな曲がり角」、「大きい影」「大きな影」、「大きい溝」「大きな溝」、「大きい山」と「メリケン粉の大きな山」、「大きい動き」「大きな動き」といった同じ名詞と結びつくと、大きなが抽象名詞と結びつくと、その大きさも抽象的になり、次の例に見るように「意味のある、重要な」といった意味を帯びてくる。

47) 野球やテニスにくらべて、テニスをもつもうひとつの大きな特徴は、打球回数が比較にならないほど多いことだ。

48) 投票率を高めることは、どこの選管でも大きな悩み。

一方、「小さな」も心理的な大きさについて用いられる。しかしこの場合、「小さな」は、「意味がない」という抽象的な意味にはならず、むしろ逆に「小さいながらも意味のある」といった意味になるようだ。

49) 長野版の小学生の詩「小さな目」に小学5年生の息子のクラスで、これまでに六人が掲載されました。

50) 高橋さんにとって、今回の“小さなコンサート”で子ども達の心に残した感動は高橋さんの感動でもあった。

51) このドラマは、小さなサーカス団をいじめる暴力団員が、山の奥深い谷間で殺される推理サスペンス。

52) 若者のまち、東京・原宿のファッションは、実は埼玉が原産—この夏、岩槻市の小さなメーカーが作ったイラストをプリントしたTシャツが、原宿を、渋谷を席卷した。

53) 大草原の小さな家。

54) 明治十八年、新宿駅前の小さな果物店から出発した「高野」は、いまや日本一高価な土地に店舗を構える「衣」と「食」の専門店。

一般に「小さい」ことは価値の低いことにつながりがちだが、「小さな」はそれとは異なる、むしろプラスの意味を担っているようだ。

次の表は、名詞修飾用法の場合の「な形」「い形」全体に占める「な形」の割合を分野別に見たものである。自然科学系⁽⁴⁾にくらべて、社会科学系⁽⁵⁾、文芸の分野の方が「な形」の使用頻度の高いことがわかる。単位はパーセント。

表5. 「な形」の分野別頻度

	自然科学系	社会科学系	文芸
大きな	60	79	86
小さな	31	54	72

こうしてみると、「な形」は決して特異な形ではなく、むしろ物理的な大小以外の心理的な大きさについては、「な形」の方がふさわしいと言える。慣用句では「大きなお世話」「大きな顔をする」のように「な形」が使われる。これも具体的な大きさではなく、心理的な大きさが問題にされているからだろう。

6 どうして「な形」は心理的な大きさを表すのか。

最後になぜ「な形」が心理的な大小を表すのか考えてみよう。

足がいたい！	いたい足を引きずる。
雛祭りは楽しい。	楽しい雛祭り
ぶりのさしみはおいしい。	おいしいぶりのさしみ

名詞修飾の「おいしいぶりのさしみ」では、終止用法の言い切りの「おいしい。」が持っている感動の意味、陳述性がなくなっている。「そういう属性を持った」という意味になり、概念化している。

父親の手は大きい。
大きい父親の手
大きな父親の手

手の単なる物理的な大きさを述べるには、「大きい」がふさわしいが、私の印象として、心理的な大きさを述べたいなら、「い形」では不十分で、「な形」がふさわしい。ものの性質は、大きさ、色、形、重さなどさまざまだが、その中でも大きさは、我々の生活にとって特に大切なものであるがゆえに、その心理面の大きさを強調したいことも多く、そこに「な形」の存在があると考えられる。

注

1. ここで用いた KWIC データは、情報処理振興事業協会技術センターの作成したもので、新聞一月分(1983年)、計算機マニュアル、理科系教科書、科学雑誌計30冊、小説、シナリオ、随筆等21冊、短編小説25編からなる。
2. 取り上げていないテキストとしては、たとえば、次のものがあげられる。
『文化初級日本語』文化外国語専門学校
『Japanese: The Spoken Language』講談社インターナショナル
3. 1992「連体修飾のシンタクスと意味 その1」『寺村秀夫論文集1』くろしお出版
4. 自然科学のデータは、注1のKWICデータから新聞のデータと文芸関係のデータを除いたもの。文芸のデータは、注1のKWICデータのうちの、小説、シナリオその他14冊、短編25編のデータ。
5. 経済の専門書3冊のデータ

参考文献

1964 『口語文法講座3 ゆれている文法』明治書院

1982 国廣他『ことばの意味 3』平凡社

1984 『研究資料日本文法第三巻 用言編 (2) 形容詞・形容動詞』明治書院

1994 橋本・青山「形容詞の三つの用法 終止, 連体, 連用」『計量国語学』18-5

データの収集に際して、情報処理振興事業協会の玉井陽子氏にお世話になりました。また、小さな文法研究会（名称未定）において幾人かの方から貴重なコメントを頂きました。記して感謝の意を表します。